

Special Number of the Ladies' Graphic
In Commemoration of the Crown Prince's Visit to Europe.

明治四十年八月一日第三種郵便物認可
大正十年九月十五日發行(第百八十九號)
婦人畫報臨時增刊
大正十年九月十日印刷
婦人畫報臨時增刊

婦人畫報臨時增刊

皇太子殿下御渡歐記念畫報

東京

大正十年九月

婦人畫報臨時增刊皇太子殿下御渡歐記念畫報目次

畫報

御同乗の日 英南皇太子殿下
(原題)

陸軍御正装の皇太子殿下
海軍御正装の皇太子殿下
御出發
東京驛御著
御處所と御食室
横濱御出帆
御遊覧
御船に於る皇太子殿下
お召艇の航進
香港に於る皇太子殿下
甲板上的御遊覧
皇太子殿下御遊覧影
御覽眞
甲板上的除典古覽
英總督の來訪
レベントガールの來迎
小費生へ拜禮を贈人
コロンボに上陸
カゼゾー植物園にて

讀物

[illegible][illegible]

アレンビ、總督御訪問
 カイトロ博物館附屬圖書館（行啓）
 フランソワゾット御皇弟影寫
 ビラマカ島御上陸
 御著英記念
 甲板にて
 マリアンヌ王女御上陸
 英皇帝陛下へ御挨拶と軍旗御贈呈
 英皇帝陛下と御同乘の皇太子殿下
 宮殿へ向はせ給ふ御途中
 ロバキンゲン宮殿
 ヨロブントン古城とウインザ・域
 アルポルト塔とインザ・行啓
 市の敬迎會
 張劔古戦場
 無名戦死者記念碑御禮拜とウエストミンスター・
 クエーン行啓
 アー・

[illegible][illegible]

影 撮 御 ス ク シ ャ



埃及カイロなるスフィンクスを御撮影遊ばさるゝ皇太子殿下。

The Crown Prince snapshotting the sphinx at Cairo, Egypt.

ボーツマウス港投錨中の御名艦「香取」中板上に於る皇太子殿下と侯爵小松輝久氏。



The Crown Prince (right) and Marquis Komatsu (left) on the deck of the Katori, while anchoring at Portsmouth.

給ふ御途中

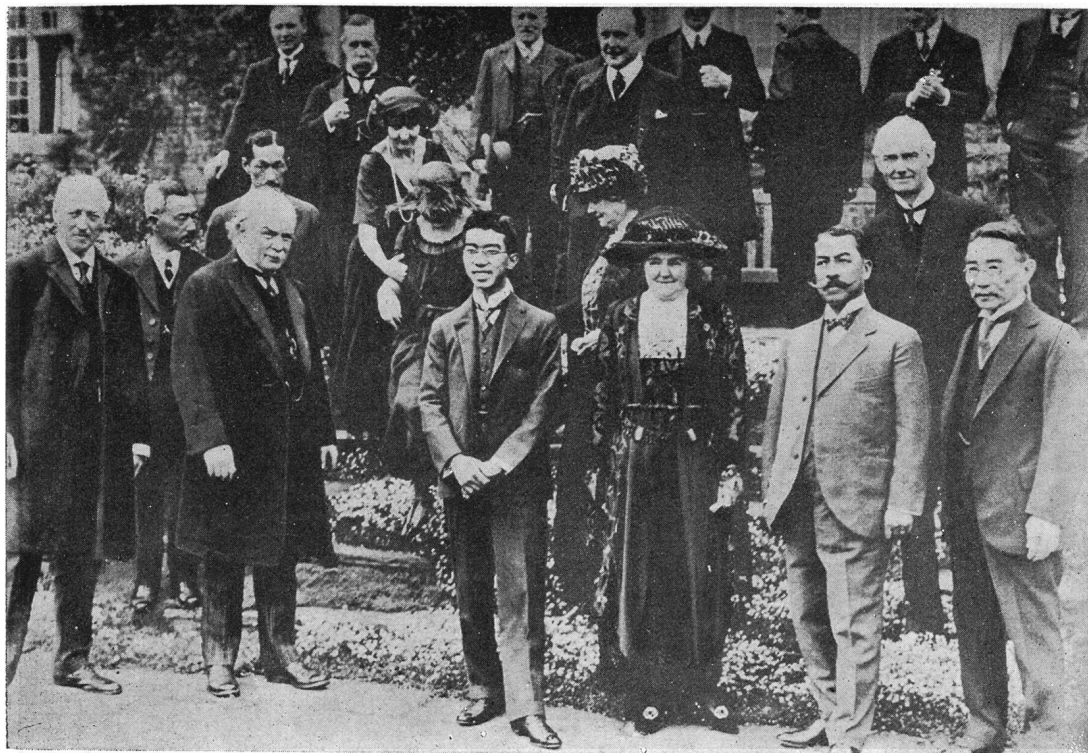
右上方圖はバッキンガム宮殿へ向はせ玉ふ皇太子殿下と御同乗の英國皇帝陛下。右下方圖は沿道に於る鹵簿拜觀の群衆。左上方圖はバッキンガム宮殿外に於る在留邦人兒童たちの奉迎。左下方圖は同在留邦人たちの奉迎の光景なり。



The Imperial procession from Victoria station to Buckingham Palace, and the immense crowd

英 國 首 相 邸 御 訪 問

(上圖) 皇太子殿下、英國首相ロイドジョージ氏別邸御訪問。殿下に御説明申し上げつゝあるは首相なり。
 (下圖) 同邸庭園に於る記念撮影にて皇太子殿下、閣院宮殿下、ロイド、ジョージ氏、同夫人、同令嬢、珍田伯其他。



Upper:—The Crown Prince and Mr. Lloyd George, Prime Minister of England. The picture was taken when His Highness visited the latter's villa.
 Lower (from the right):—Count Chinda, Prince Kan-in, Mrs. George, the Crown Prince, Mr. George and others.

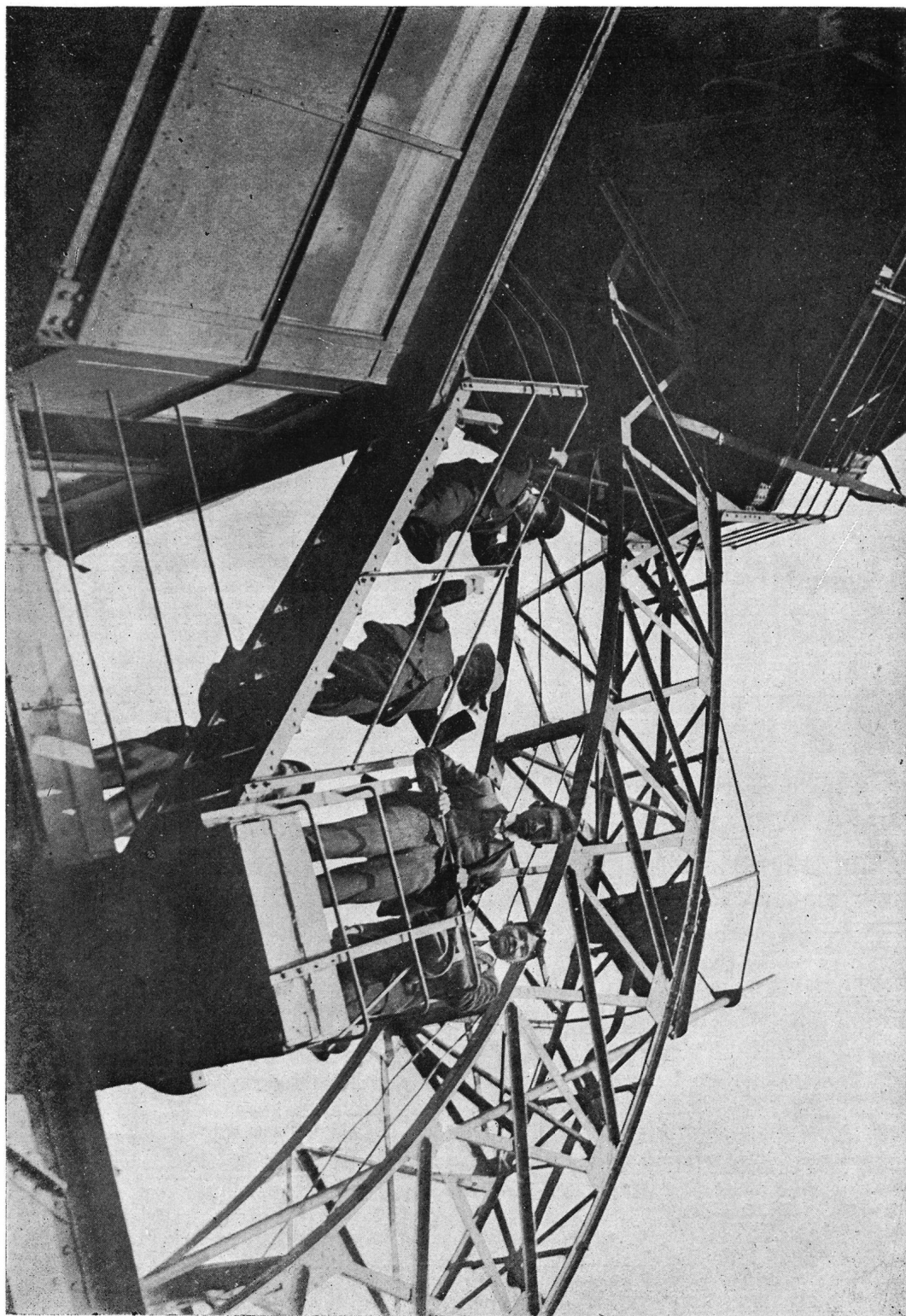
ふまたを手握に女孫相首英



皇太子殿下が英國首相別邸にて首相の孫女に握手をたまふ光景。

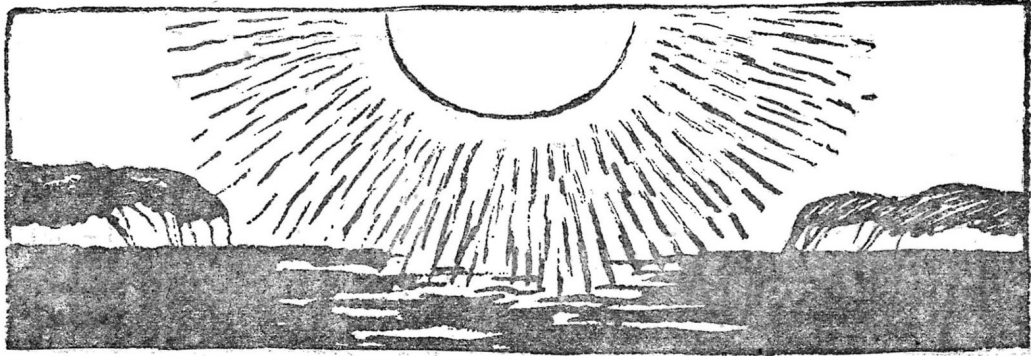
The Crown Prince shaking hands with the grandson of Mr. Lloyd George. From the left:—The Crown Prince, the Premier's grandson, Mrs. George, Prince Kan'in, Count Chinda. Mr. George is just behind the Crown Prince.

下殿の上塔ルエフツエ



The Crown Prince and Prince Kan'in on the Eiffel Tower.

巴里エッフェル塔上に於ける皇太子殿下(右より二)、閑院宮殿下(同三)並に随員一行。



皇太子殿下の御渡歐

二

東宮殿下今回の御外遊は、洵に振古未曾有の盛事、有史以來の芽出度き御事として萬民齊しく祝ぎまつるところである。天津日嗣を承けさせ給ふべきやんことなき御身を以て、波濤萬里を踰えさせられ、親しく泰西先進諸邦の制度文物を御見學あらせらる。帝王の學を御修業あらせらるゝ上に於ても、これ以上の活學問は無かるべく天資英邁に亘らせ給ふおん上に、更に文明諸般の事物に就いて明智を研かせ給ふた。これ營に殿下御一人の御爲のみならず、七千萬同胞に取り、至上の幸福として衷心より仰ぎまつる次第である。

御發程以來隨所に於て熱誠溢るゝ如き歡迎を受けさせられ、英佛伊外御訪問遊ばされた國々の元首は勿論、國民一般が「日本帝國皇儲」として狂するが如く歡迎し奉つた事實は、國交上の微妙親和關係に益する處甚大無限と謂つべく、これまた國民一般の深く銘記感激せねばならぬことである。英主の徳は「駿乎として時雨の如し」と云ふ言葉があるが、全く諸事平民的に亘らせ給ふ殿下御一人の御徳は、今



下には閑院宮殿下御案内の下に、我東宮殿下と肩を並べて御召艦内の御座所に成らせられ打解けて種々の御物語りを遊ばされた。

此時英國飛行機は爆音勇ましく艦上に飛來し縦横に飛翔して此の記念すべき日の喜びを祝ほぎ奉つた。斯くて十時三十五分、兩殿下には御座所を御立出でられ、漢那艦長御先導申上げ、御陸まじげに肩を並べて御物語り遊ばされつゝ舷梯を下らせ給ふた。

英帝御出迎

バツキングラムへ

英國皇太子殿下と共に御召艦舷梯を下り立たせられた我東宮殿下には、供奉員扈從の下に、波止場に堵列奉迎の英水兵隊を御閱兵遊ばされた。波止場前面の廣場には群集黒山の如く垣を成して犇めいてゐる。英國海軍軍等隊は君が代を奏し、金色燦爛たる盛装の文武百官列を整へて其間を練る。壯麗云ん方なく、ポーツマス港頭未前の盛觀を呈した。

斯くて殿下には群集歡呼の間を、波止場近くのプラツトホームに成らせられ、英皇室より御差廻しの特別列車に御塔乗、十時四十分發車となるや、日英兩皇太子殿



御上陸、ヅキクトリヤ停車場御到着、バツキングワム御入城等の光景を映寫して何れも市民の大喝采を博してゐた。

牛津大學御成

十四日はオックスフォード大學を訪問遊ばされた。倫敦から六十三哩、劍橋と共に學問の都として知られた處である。此日御召列車オックスフォード停車場に到着するや、大學副總長以下大學の代表者停車場にお迎へ申上げた。大學の諸建築を御巡覽の後、講堂に於て講義の模様を御見學、在學の日本留學生に特に拜謁を賜はつた。

御晝餐の後、學生の端艇競漕を御覽になり、運動場にては各種の運動競技を御見物遊ばされたが、學生の群は皆寫真機を以て殿下を寫し參らせんと、群を成して寄りくるを笑顔を以て御覽遊ばされつゝ、學生の無邪氣な嬉遊に殊に興がらせ給ふたと承る。

半日の御愉快なる御見學を終らせられて、午後倫敦へ御歸還、午後八時半よりダリス劇場に成らせられて、倫敦歌劇女優中のクエーンと稱せられ居るゼ・ヨウ・コーリンのシビル劇を御覽遊ばされた。同座にては殿下御來臨を無上の光榮とし、特



打寛ろぎたる御内宴を開かせられ、巴里入都の第一夜をいと静らけく御過し遊ばされた。

大統領御訪問

六月一日。佛國御訪問は非公式御微行の體ではあつたが、本日殿下には大統領ミラン氏を其の官邸たるエリゼー宮に公式の御訪問を遊ばさるゝ事になつた。

午後零時四十五分、殿下には閑院宮殿下と御共に石井大使、珍田供奉長以下を従へさせられ自動車にて大使館御出門、シャンゼリゼー街を通り同五十七分エリゼーの大統領官邸に御着。宮前には禮装美々しく着飾りたる佛國近衛兵堵列して奉迎しまつる。此處に於て迎へられたる東久邇宮殿下と御對顔の上、玄關に出迎へたる首相ブリアン及フォツシユ元帥の御先導にて、近衛軍樂隊の君ケ代吹奏裡にエリゼー宮に入御、御休息の上接見室に於て大統領ミラン氏と公式の御會見あり、同所にて日本皇帝陛下御名代として大統領に菊花大綬章を御贈與相成り、種々御物語りの後大統領夫妻主催の午餐會に臨ませられた。

此日の午餐會は近頃稀に見るの盛會であつた。大食堂は美々しく飾られ、列席の人々は皆佛國一流の知名の貴顯紳士、歐洲大戰に於て驍名を馳せたる名將ジョツフ



伊太利へ

佛^{ふつ}御^ご退^{たい}去^{きょ}に際^{さい}し東^{とう}宮^{ぐう}殿^{てん}下^かには佛^{ふつ}國^{こく}民^{みん}に對^{たい}し左^さの如^{ごと}き告^{こく}別^{べつ}の辭^じを寄^よせられた

『予^よは佛^{ふつ}蘭^{らん}西^{せい}より最^{もと}も貴^き重^{ちゆう}なる記^き憶^{おく}を齎^{もた}らして歸^き國^{こく}するものである。戰^{せん}場^{ちやう}の實^{じつ}際^{さい}を
見^みるに、佛^{ふつ}國^{こく}軍^{くん}人^{じん}が勇^{ゆう}敢^{かん}機^き敏^{みん}に抗^{かう}爭^{そう}した跡^{あと}歷^{れき}然^{ぜん}たるは其^{その}勇^{ゆう}武^ぶまこと稱^{しょう}揚^{やう}すべき
である。予^よの心^{しん}中^{ちゆう}に残^{のこ}りたる最^{もと}も深^{ふか}き印^{いん}象^{さう}はラ^らン^んス及^{およ}び荒^{わう}廢^{はい}せる地^ち方^{ほう}の光^{くわう}景^{けい}である
猶^{なほ}戰^{せん}争^{そう}を讚^{さん}美^びする人^{ひと}々^々の眼^めに此^こ等^{とう}の場^ば所^{じよ}は果^{はた}して如^{いか}何^かに映^{うつ}るか。』

と仰^{おほ}せられ、更^{さら}に荒^{かう}廢^{はい}地^ち方^{ほう}住^じ民^{みん}の戰^{せん}争^{そう}の慘^{あん}害^{がい}を恢^{くわい}復^{ふく}する爲^{ため}め勇^{ゆう}敢^{かん}に努^{どり}力^{りき}を續^{つづ}け居^ゐる
事^じ實^{じつ}を稱^{しょう}揚^{やう}された。戰^{せん}争^{そう}の慘^{あん}害^{がい}を口^{くち}の當^{あた}り御^ご見^{けん}物^{ぶつ}あらせられ、平^{へい}和^わ愛^{あい}好^{こう}の尊^{たう}き御^ご心^{しん}
より戰^{せん}争^{そう}讚^{さん}美^び者^{しゃ}を誠^{まこと}め給^{たま}ふ御^ご胸^{ちゆう}中^{ちゆう}拜^{はい}察^{さつ}するだに畏^{かしこ}み極^{きは}みである。

御^ご召^{めい}艦^{かん}香^{かう}取^と供^く奉^{ほう}艦^{かん}鹿^か嶋^{しま}の幻^{くわん}航^{かう}されあるツ^つー^るロ^ん軍^{ぐん}港^{かう}にては、之^{これ}より先^{さき}日本^{にほん}艦^{かん}隊^{たい}乗^{じよう}
員^{いん}將^{しやう}校^{かう}等^{とう}を市^し會^{かい}議^ぎ事^じ堂^{どう}に招^{まう}いて遠^{えん}航^{かう}の勞^{らう}を慰^いすべくレセプシヨンを開^{ひら}いた。ツ^つー^るロ
ン市^し長^{ちやう}は起^たつて演^{えん}説^{せつ}を爲^なして『佛^{ふつ}國^{こく}は過^すぐる歐^{おう}洲^{しゆう}大^{たい}戰^{せん}の際^{さい}、日^に本^{ほん}と提^{てい}揚^{やう}して共^{きやう}同^{どう}の
敵^{てき}に當^{あた}つたことを誇^こりとするものである』と述^のべ、之^{これ}に對^{たい}し小^{せう}栗^り海^{かい}軍^{ぐん}中^{ちゆう}將^{しやう}は『日^に本^{ほん}
海^{かい}兵^{へい}は佛^{ふつ}國^{こく}に於^おて受^うけた歡^{くわん}迎^{いよう}を決^{けつ}して忘^{ぼう}却^{きゃく}するものでない』と答^{こた}へた。中^{ちゆう}將^{しやう}以^い下^げ幕^{まく}
僚^{りやう}が市^し會^{かい}議^ぎ事^じ堂^{どう}を辭^じ去^{きょ}するや、門^{もん}外^{がい}に待^{まち}構^{くわい}えたる群^{ぐん}衆^{しゆう}は盛^{さか}んなる喝^{かつ}采^{さい}を浴^{あび}せかけ、

海國の聖東宮の御渡歐

140

侯爵 大隈 重信

昔、日本武尊は皇太子の御身を以て自ら旅に出掛けられ征伐をなされた。その頃の旅は實に困難を極めたものであつた。しかも日本武尊はその困難な旅をお続けになり、また苦心慘憺して東夷を平定し給ふた。

その後次第に國が發展するに従つて、天子や皇太子も四方に御出掛けになり、又自ら兵を率いて國をお治めになつた。齋明天皇の御代に唐が朝鮮に侵入して來たので、朝鮮は、我が日本に援助を乞ふて來た。その折まだ皇太子におはした天智帝は、その援助の爲めに九州までお下りになつた。が、驢て齊明天皇が崩御になつたので、國內の政治をとる爲めに御引揚げ遊ばされた。

以上の二人の皇太子は歴史上に現はれた、皇太子として御活動なされた例であるのである。然るに今度現今のわが皇太子殿下は、二隻の軍艦を率いて英佛その他の諸國を御訪問遊ばされたのである。そして御無事に御目出度く御歸朝になつた。今日は昔時の様な草枕の感じはなくて、縦令長い航海で

はあつても、軍艦の中にはいろ／＼な遊戯もあり、音楽もあり、また讀書も出来るのである。けれど殆んど三ヶ月半の海上御生活の中には、炎熱や風濤がある。それで大概の人は身體を疲勞せしめたり、また病氣になるものもあるのである。然るに我が殿下には益々御健勝に渡らせられた。これに由つて觀ると殿下が如何に強健な御身體と、優れた御神經とをお持ち遊ばされるかを拜察し奉ることが出来る。

古より我が皇室には、海上に活動する和田津神の御血が通つてゐらせられた。歴史を繙いて見るとそれが明かにわかるのである。そして勇壯な、元氣な、大膽な、偉大な二千年以上傳はり來つた其御血が、どの頁にも見えるのである。その御血統を御受け遊ばした皇太子殿下は、今度の御渡歐に依つて見ても、御精神御身體共に御強健に渡らせられることが證明される。

我々國民は兩陛下と共に、御出發の御當時より、海上は如何、印度の炎熱は如何とお憂慮し奉つたのであつた。

倫敦で殿下に拜謁して

宮内省主殿寮事務官 三善 惇彦

昨秋歐洲各國の宮殿前として出張を命ぜられた同氏は、倫敦滞在中適々東宮の御訪英の盛事に會し、謁見まで賜つたが、五月廿五日郵船三島丸で歸朝の途に就き、六月十六日神戸着同十八日歸京した。氏は實に殿下御訪英の盛事を目の邊り目撃して、其實況並に感激の情を我が國民に傳へた最初の人である。

九月九日、此の日は日東帝國の東宮殿下と、同盟の友邦大英國の皇帝陛下とが、堅き御握手は交はされ、兩國親善史上に一大記録を遺された日である。

此日は朝來どんよりとした天候であつたが、午前十一時頃から、麗かな陽が輝き出て、眞に日本晴れの好日和となつた。

一方ザキクトリア停車場並にバツキング宮殿に至る沿道の光景は御召列車の御到着が正午過ぎなるにも拘はらず、朝まだきから此日東同盟國の御世嗣の君を拜せんとする群衆で身動きもならぬ程であつた。而して英、蘭、蘇格蘭、ウエールス軍隊の精華を集めた近衛兵の代表部隊は、御通路の兩側に堵列し、軍樂隊は此處彼處に配列せられて居た。

一七二

自分是我が大使館から入場券を貰つて、館員始め、島津公、大炊御門侯、其他六十餘名の在留邦人と共に同停車場に奉迎した。プラットホームは紅白の花と、日英兩國旗と、羊齒とを以て目も醒むるばかりに美々しく飾り立てられた裡に、御正装の英國 皇帝皇、兩陛下、並に皇族を始め、内閣員一同、其他の文武百官は、禮装嚴めしく綺羅星の如く整列して、殿下の御着を今や遅しと待ち受けた。

英國皇帝陛下には、日本大使館員一同に握手を賜ひ、又主なる在留日本人は、非常なる興味と歡喜の情を胸に抱きつゝ、兩陛下を仰ぎ奉り、盛装せる同國陸海軍高級武官と言葉を交はしながら、御到着を待ち設けて居た。

午前十時四十分、ボーツマス停車場を發したる 皇太子殿下と英國皇太子殿下御塔乗の特別列車は、豫定の如く、十二時四十分日英兩國旗を機關車の前に交叉して、這るが如く徐にプラットホームに入つた。待ら設けたる軍樂隊は「君ケ代」を吹奏した。

應て陸軍少佐の御正装を着けさせられた我が皇太子殿下には、陸軍大佐の御制服を召された英國 皇太子殿下と御同列にて、悠容とプラットホームに降り立たせらるゝと、英國皇帝陛下にはツカ／＼と玉歩を運ばせられて、同國皇太子殿下の御紹介に依つて、茲に日東帝國の皇太子殿下と、大英國の皇太子陛下には、初めて固き御握手を交はさせられ、且つ御挨拶

未だ曾て見ざる御性格

杉浦重剛

崇嚴にして雄大なる君徳の御參考となるべき、古今東西の格言及び實例につき、御進講申上ぐるに、晉に能く、其要領を御會得遊ばさるゝに止まらず、御自發の御識見の高邁なる、只管欽仰の外なし。且身常侍の職にあらざるを以て、御平素を詳知する能はずと雖も、觀察の及ぶ限りに於ては、一に御實行遊ばさるゝを見るなり。不肖三十八年間、高等普通教育に従事し、萬を以て數ふべき、天下の英才に接觸したれども、未だ曾て見ざる所の御性格なり。

極めて文明的な御頭腦

文學博士 白鳥庫吉

私は七年間皇太子殿下に歴史をお教へ申しましたが、まだ殿下程學問に御興味深く、而も御熱心で、御頭腦のすぐれた方に接したことはございません。殿下は學課に對して、非常に御注意を拂はれ、御理解がよく、悉皆御記憶なされると

いふ風で、學問の爲めに學問をなされると拜察いたします。殿下は御勉強なされたことを直ちに實際生活の上に御活用遊ばされるのであります。殊に道德倫理の教育をそのまゝ御實行遊ばされるので、そのお偉い所には驚嘆と稱讃とに打れずにはゐられません。

殿下は諸の學課はいふに及ばず、總てのことに畢生の御努力を遊ばされ、根本的に御研究をなされるのであります。殿下はお健かな御體格と、文明的な御頭腦とを持たせられ、總てに御秀で遊ばされます。馬術、弓術、擊劍、遊戲、軍刀、游泳、ゴルフ、クリケット等にも御造詣深きは申すまでもなく、歌道、動植物學、物理學、數學などにもお秀で遊ばされます。即ちまんべんなき御知識と趣味とを御持ち遊ばされるのであります。

一體日本の學生は、或一面に偏し、例へば數理にたけたる者は文學方面にうとく、文學に詳しきものは、數理の知識に乏しいのであります。然るに殿下は、實に理想的な、圓滿具足な知識をおもち遊ばしますので、たい驚くの外はございません。

殿下は溫厚寛仁の御性格に渡らせられ、御情殊の外お厚く、御思ひ遣り御深く、御學友に對しても、周囲の人々に對しても、如何なる場合にも、放縱な御態度や、氣取つた御様子遊ばされたことが御坐いしません。

佛國一雜誌の論評

宮内參事官 渡部 信

巴里で發刊せらるゝ有名なる某誌に東宮殿下歐洲御旅行に關し、大要左の如き記事を掲載した。外國人の我皇族に對する感想及批評の一端を知る參考として茲に其の要旨を紹介する。

日本皇太子の歐洲御旅行

日本皇帝四皇子中の長子に當らせらるゝ裕仁親王は三月三日西洋に向つて日本を出發せられ、途中英領印度、埃及、マルタ、「ジブラルター」に立寄らせられ、數週間英國に御滞在の後佛國を來訪せらるゝ御豫定である。

今次の御旅行は日本帝國の歴史に一時期を劃するものである。何となれば僅々五十年來歐洲の文明に開放せられたるに過ぎない日本帝國の皇子中、其の祖先傳來の國土を離れられたのは、實に今回を以て嚆矢とするからである。風評に依れば、殿下の御出發に際しては、國民の一部に反對運動を惹起し、中にも頑固一徹の舊思想を有する熱狂的愛國家の一派は、日本古來の沿革に反し、神慮に背馳する企なりと迄考へ、

御發軔を妨げんとくはだてたものさへ、あつたやうにも傳へられる。

勿論這は一挿話に過ぎるべきも、一面民心の情緒特質を談るものと云つて可い。吾人は永く近代の日本を知らなかつた。否寧ろ吾人は日本よりして我西洋文學者の想像を樂ましめた詩的繪畫を知らんと欲したのみであつた。然るに或人々は事實を皮相的に觀察し、誤解誇張して今日の日本帝國を、西洋の何れかの民族と同視せんことを試みて居た。惟ふに、日本も我國々と同様の甲鐵艦を有し、同様の大砲を有し、又同様の戰爭手段を有する以上、滿洲に於ても先んじて吾々と同様の軍略を應用せるは素より當然の事ではないか、けれども日本を歐洲の國民と同視せんとする人々は、日本に於ける向上進歩の主導者が今猶歐米の文物に對し抵抗しつゝあることを忘れたるものある。

裕仁親王は御年僅二十歳に過ぎざるも、日本に於ける二種の相反せる傾向を融和すべき御使命を有せらるゝもののやうである。殿下は御祖父に當らせられ舊幕府の封建制度を破壊して、舊日本を覺醒せしめられたる大皇帝睦仁陛下に御容姿似給ひ、日本の名譽と光榮とに滿つる過去を忘れざる人人は、殿下を敬愛するの念特に深く、御若き殿下を拜して、今日に至る迄、人々の最敬虔措かざるものゝ生きたる靈像と觀るのである。然れども殿下は斯の如く泰平なる一般民情に